

(様式第 1 号)

平成 2 1 年度第 4 回 社会教育委員の会議 会議録

日 時	平成 2 2 年 2 月 8 日 (月) 1 4 : 0 0 ~ 1 6 : 3 0
場 所	市役所北館 4 階 教育委員会室
出 席 者	議 長 花木 義輝 副 議 長 樋口 茂 委 員 安東 由則 委 員 野原 三恵子 委 員 信岡 利英 欠席委員 水谷 孝子 欠席委員 大江 紀子 欠席委員 中村 美津子 欠席委員 玉暉 潤 教育長 藤原 周三 事 務 局 社会教育部長 橋本 達広 , 生涯学習課長 津村 直行 主 査 渡邊 一義 , 課 員 北詰 真衣
事 務 局	社会教育部生涯学習課
会議の公開	■ 公開
傍聴者数	0 人

1 会議次第

(1) 教育長挨拶

要旨：兵庫県立芦屋特別支援学校について
教育振興基本計画について

(2) 議題

- 1 . 「芦屋市教育振興基本計画」の進捗状況について
- 2 . 社会教育関係団体の登録について
 - ・ 平成 2 1 年 1 2 月 1 0 日 ~ 1 2 月 2 5 日受付分

(3) その他

2 提出資料

- 資料 1 「芦屋市の教育に関する現状・課題」
資料 2 「芦屋市社会教育関係団体申請数」

3 審議経過

開会

(花木議長)

本日は、それぞれ色々とお仕事を抱えておられるだろうに、わざわざこの時間をとっていただきありがとうございます。

それでは、本日の議題にあります「芦屋市教育振興基本計画」の進捗状況につ

いて事務局から報告をお願いいたします。

（生涯学習課長）

お手元に資料を2つ用意しております。1つは、「芦屋市の教育に関する現状・課題」もう1つは、「芦屋の社会教育（案）」。

これは、まだ完全な形にはなっておりません。これにつきましては、昨年3月に策定をしております「第2次芦屋市生涯学習推進基本構想」38ページに生涯学習ガイドブックの作成ということが書かれております。それに基づいてこの「芦屋の社会教育」の作成をしているところでございます。

本市では、平成12年以前は「芦屋の社会教育」をつくっていたようですが、それ以降現在に至るまで作成がされていないという現状がございます。今回を期に「芦屋の社会教育」を作成します。合わせて「芦屋の社会教育」に書かれている内容が、芦屋の社会教育の現状を把握することになりますので、基本計画の中で同時進行をしていきます。内容に変更もあるということを前提としながら、こういうものが作成をされるのかということを見ていただきたいと思います。今日は案の段階でありますけれどもご用意させていただきました。できましたら、修正もございますので、今日の段階では回収をさせていただきたいと思っております。今年度内に完成をさせていきたいというふうに思っております。

それから、もう1つ、「芦屋市の教育に関する現状・課題」がありますけれども、実はこの後に膨大な資料がつく予定にしております。ページ数が非常に多いので割愛をさせていただきました。だいたい100ページぐらいのバックデータです。教育振興基本計画の策定委員会を2月16日に開催する予定にしております。さきほどのような実態をふまえながら社会教育分野の現状と課題をまとめようとしている最中でございます。「芦屋市の教育に関する現状・課題」を簡単にご説明をさせていただいてご意見をいただければと思います。

「芦屋市の教育に関する現状・課題」6ページ、大きく上のところに と書いてあって、左端の大項目、中項目ということですが、これにつきましては、基本的には芦屋市生涯学習基本構想の中で書かれてある項目ごとに整理をしようと思っております。といいますのが、この計画全体といたしましては、特に計画用のアンケートをとっておりません。社会教育分野につきましては、「第2次芦屋市生涯学習推進基本構想」を策定する段階で、平成19年度にアンケートを実施しております。そういうこともこの中に反映をさせていきたいと考えております。

「まちづくりのための生涯学習」ということで大きく中項目を3つに分けております。まずは、「地域を知る」、2点目は「地域課題の共有と解決」、3点目は「市民参加の仕組みづくり」という形で書かせていただいております。

1点目は、「地域を知る」。社会教育を進めていく中で、その地域課題等を見ていくためには、地域を知ることが大切でございます。また、市民の方にも知っていただく課題でございます。現状といたしましては、市の色々な施策を含めて生涯学習の出前講座という形で私どもが実施をしております。これは、一定の人数が揃われ、ご要望いただければ提示しておりますメニューの中で、職員が直接そこに出向きましてお話をさせていただいているものでございます。これは、知っていただくと共に職員がそこにお邪魔してお話をさせていただきますので、一方では職員が地域を知ることになると思っております。

2 点目につきましては、文化資源になっております。特に、文化財を中心にしてということでございますけれども、そうしたものの講座等につきましても公民館・美術館で実施をさせていただいているという現状があります。それから、「地域課題の共有と解決」というところがございますけれども、特に、でございまして、具体的には愛護委員が活動されている部分でございまして、これを「地域課題の共有と解決」という項目に入れるかどうか悩んでいるところでございます。

3 点目は「市民参加の仕組みづくり」につきましては、本市には「芦屋市市民参画及び協働の推進に関する条例」がございますので、それに基づいて市民参画を行っている現状があります。

7 ページをご覧ください。「学習機会」ということでございますけれども、『「いつでも」「どこでも」「だれでも」学習することのできる学習環境』で、につきましましては公民館、図書館等を整備してその連携を図りながら実施をしていくという部分、平成 21 年 6 月に障がい者スポーツ指導者協議会を設立し、現在具体的施策を見当している状況がございます。が県立国際高校に委託している事業でございまして。もう少し、公民館講座等の部分もこの中に記載をしていくべきかなというふうに考えております。

「連携による学習機会」ですが、この時代ですので、インターネットを活用した色々なことにも取り組んでいるという現状があります。その部分も書かせていただきました。

「情報提供・学習相談体制」これにつきましては、生涯学習課が社会教育及び社会教育関係団体に関する相談窓口を行っております。図書館でもレファレンス業務を行っています。これは、社会教育施設として括った方がいいのかなと考えております。具体的には、図書館とか個別に挙げるのではなくて、社会教育施設の窓口全てがこういう対応をしていると言えるのではないかと考えております。

でございますけれども、市の広報誌、ホームページを中心に広報を行っているわけですが、具体的な取り組みとして施設ごとに色々な情報紙を発行しております。図書館であれば「図書館だより」を出しておりますし、市民センターであれば「市民センターだより」というものを通して情報提供に努めているところでございます。

は先ほど述べました生涯学習の出前講座でございます。情報提供ができるように、「芦屋の社会教育」という冊子も作成をする予定にしております。芦屋市教育振興基本計画は今年の大体 11 月か 12 月に出来上がるということになりますので、その時には「芦屋の社会教育」も完成をしています。

8 ページでございます。「施設の整備及び運営」ですが、私どもとして提供しているのは基本的に小学校を地域のコミュニティ・スクールという団体に対して無料で開放し、活動の場所として提供しております。

の「老朽化した施設や設備を改修」というのは、市民センターが大規模な改修を今年度しております。耐震も含めて 12 億をかけて施設整備を進めているところでございます。これに加えて今後は全体としてどうかという問題もこの中に記入をしていきたいというふうに思っております。

その下の「インターネットを活用し」というのは、先ほど出てきたものの再掲です。

9ページの「学習成果の発表と活用」というところですが、現段階の取り組みとしては、「公民館講座を中心に地域活動や地域の指導者となる人材の養成に努めている。」ということがあります。公民館は、それまで公民館で講師をしていた方に加えて地域の色々な分野の講師であるとか大学の先生であるとか講師リストを作成しております。これを活用できるように整理をしていきたいと思っております。

2)「学習成果」という部分では、今現在はこういう形で挙げております。これももっと成果をどう還元をしていくかという課題がありますけれども、現段階ではこの3つくらいしか書けないのかなという部分です。

一番最後の6「文化・スポーツ活動に対する支援」ですが、これにつきましては、「芦屋市スポーツ振興基本計画後期5カ年計画」がありますので、その計画をもってこの項目に充てるという方向になるかと思えます。

最近、色々な計画ができておりまして、例えば、子どもたちのエンゼルプランという次世代育成支援計画があるんですけれども、その中には障がい児に対する対応という項目があります。その場合は、障がい者の福祉計画というのは別につくられておりますから、新たにつくるということではなくて、それをもってその計画に充てるという手法を取ってきております。ですから、私どものこの教育振興基本計画の中でも、スポーツ振興については、「芦屋市スポーツ振興基本計画後期5カ年計画」に当てはめていくという手法を取りたいと考えております。

ご指摘がございましたら是非ご意見を賜りたいというふうに思っております。それをもって、今度の2月16日の教育振興基本計画策定委員会の中で説明をさせていただこうというふうに思っております。課題のところにつきましては、それぞれの基本構想の中にあるものを記入させていただいたということでございます。非常に簡単な説明になりましたけれども、以上とさせていただきます。少しお目通しをいただいて、ご質問、ご意見等いただけましたらありがたいと思っております。以上でございます。

(花木議長)

この議題説明について、何かご意見ございましたらお願いします。

(野原委員)

先ほど教育長の挨拶の中で、中学校を開放するのはちょっと難しいというお話がありましたが、市の幼稚園というのは利用できないんですか。幼稚園というのは小学校より早く切り上げますよね。市のものだったらそこも結構使えるんじゃないかなと思ったんですが。

(生涯学習課長)

幼稚園の場合は、全園というわけではありませんけれども、子育てグループの活動場所になっています。また、園庭も含めて幼児を対象とした広さですから、通常の大人在活動するスペースには成り得ない。昔は、子育て支援センターというのが生涯学習課が所管していたんです。今は子ども課が所管していますけれども、そのスタートが精道幼稚園の保育時間が終わって以後、子育てセンターとして利用しています。だから、全く開放していないということではなくて、活動場所として機能は持っています。

(野原委員)

入り込める余地は無いと。

(生涯学習課長)

大人の方が中学校のグラウンドとか，そういう所を貸して欲しいというのが一番大きいんです。

(社会教育部長)

大人が時間外に有効に使わせて欲しいということですね。幼稚園では，月，水，金のお弁当日の時に 4 時ぐらいまでですかね，保護者の管理責任で園庭を開放しているのが実態なんです。遊ばせるところがなかなか芦屋の場合はあって無きようなところがあって，下校時に保護者が迎えにきている中でもうちょっと延長して子どものことを情報交換したりというのはどこの園でもやっていると思うんです。保護者責任ですけれどね。大人に開放する余裕はちょっと無いと思います。

(生涯学習課長)

椅子，机も幼児用ですので，大人がとても座って長時間対応できるような施設ではありませんので。

(花木議長)

中学校の場合は，特にスポーツ関係からの要請だと思いますね。体育館とか校庭とかの使用要請がおそらく出ているんだと思いますけれども。確かに，施設が足りないといえば足りない。

(社会養育部長)

中学校は部活で結構使われている。また，生徒指導面で非常に難しい。

(野原委員)

ちょっと議論から外れるかもしれないんですが，今おっしゃったように幼稚園で子育てセンター代わりみたいな組織があり，ちゃんと機能しているのであれば，なんでこんなに子育てグループが多いんでしょうかとふと思ったんですが。

(生涯学習課長)

親同士の交流の場，グループをつくっていくということは非常に子ども課が力を入れているところです。社会教育の分野で言いますと，こういうグループ化というのは幼児教育の講座で取組んできました。核家族化でご両親が遠方にいらっしゃる方などが子育ての悩みを話し合う場の提供に取組んだものです。これが難しいのは，子どもが成長していくと継続性が難しい。子どもが大きくなって，もう違う小学校とかになってくると，離脱をし解散をしていく。それを，今おっしゃっておられるように幼稚園をターゲットにし，保育所をターゲットにしたりして，色々な形で活動しやすいグループをある程度小さい単位でつくっていかないと，なかなか集まるのが難しいということがあります。地域でそれぞれでグループをつくっていく。幼稚園や社会教育施設を活動の場にしたりすることになりますから，一番のネックは運営資金なんですね。皆さんの会費でやりますから。そ

うすると、こうした社会教育活動をする団体として登録をして、利用料の3割減免を受けるとするのは非常に小さなグループにとっては大きい部分ですから、そういう活動を地域の中でつくっていくということを施策的にも取組んできたというのがあります。必ずしも幼稚園や保育所だけではなくて、社会教育施設の中にもそういうことがある。

計画の中で議論になると思いますけれども、幼児期の教育をどうするか。芦屋の幼稚園教育・保育所の保育は素晴らしいと一定の評価を受けています。では全ての子どもが芦屋の幼児教育を受けておられるかということそうではない。では、芦屋の幼児期にある子どもたち全体をどうするかという課題です。そういうものが定着をしていくと、それを補うものとして次の活動が育まれていくのが大事だと思っております。

（安東委員）

「芦屋市の教育に関する現状・課題」の「芦屋市の社会教育・家庭教育に関する現状・課題」の2）自治会や老人会のところでもっとやられていることを具体的に書いて欲しい。

（生涯学習課長）

愛護委員の活動は地域課題を共有していくという活動につながっているんですけども、ここでいう「地域課題の共有と解決」という項目に入るかどうかちょっと悩んでいます。

（樋口副議長）

地域を知るという出前講座、出前講座そのものの頻度だとか実施状況を見ると、出前講座で地域を知るといふほどのことを本当にしているんだろうか。年間何回出前講座があるんだということを考えてくると、これをもって地域を知ると言うより、何かもっとインパクトのあることでをもって地域を知ると言うことをしていますという方が必要ではないか。私が理事長をしているあしや市民活動センターの方にも出前講座を1回してもらったんです。出前講座の経験がないものだからとにかく身近なところでお試しでさせて下さいというところからスタートしたんですが、とても講座というところまで仕上がっていないなというところが実際の感覚でございました。そういう意味から言うと地域を知るという手段としては、これについて何かもっと他にないのかなと思ったりするんですけどもね。

（生涯学習課長）

例えば、生涯学習課の職員であれば地域に入っていく機会は多々あります。コミスクの行事にも参加をさせていただく。PTAの関係やユネスコの活動にも参加させていただくというように色々な形で地域に入っていく機会があります。こういうものが地域を知るといふ一部分的なものになるだろうと思いますが、市全体、もしくは教育委員会全体で考えますとそういう機会が意外とないんです。樋口委員がおっしゃる通り、この現状を書こうとした時に、思い当たる部分が出てこないんです。では、市の他の職員がどこまで地域の中に行かせていただいて、そこで一緒に何かをすることがあるかなと思ったときには、特定のものはあるんです。例えば、芦屋の三大祭りとかをやっている時には市民参画の窓口

いる職員が一緒になってやるんですね。1つ、2つは直接的に、間接的に関わる事があったとしても、市が色々な施策とか今後の方向を考えていく時に、どこまで地域を知っているのかというたないんですね。おかげさまで生涯学習課についてはそういう機会が多分にあるんですけれども、市の職員が地域の中にどこまで関わっているのか。その現状と課題をそこから持ち帰りどう対応しているのかといったら無いんですね。例えば、出前講座はおかげさまでかなりご要望があります。私も福祉にいたる時には、講師で多い時には月に1、2回おじゃまさせていただいたことがあるんです。当時私は介護保険課長をしており、その時は介護保険の制度改革の時期で、高齢者の団体や理事会に随分行かせていただきました。基本的には行かせていただくことが、市の色々な制度の情報を知っていただくことにもなりますし、疑問に思われている部分を解決していくことにもなります。皆さんがどういう疑問を思われているか、どういうことを望まれているかを知る機会にはなるんです。ですから、このメニューを色々な形で増やして、行政のしていることを知っていただくと同時に、そういう施策について皆さんがどういうふうに思われているのか、どういう課題を抱えておられるのか、そこに入っていくことによって分かる部分がありますので、この制度としては1つのきっかけにはなるだろうと思っております。利用されていないということであれば、もっと利用していただけるようにこの制度の拡充をしていきたいということが我々の今後の課題かなというふうには思っております。

（野原委員）

地域を知るということの意味、何をもって地域を知るといえるのかというのは幅が広すぎてちょっと捉えにくいところがある。例えば、今、美術博物館で震災の写真展をやっていますよね。あれとタイアップして、芦屋の復興の講座とかがあれば、企画としてはいいのでしょうか。私も行きましたが、何人来ていらっしゃるかといったら、ほとんど来ていらっしゃらなかったですね。市民が何をもって自分たちの知識をと言いましょうか、出かけてまで見に行つてというものがすごく難しいと美術博物館で感じたんですけれどね。

（社会教育部長）

1月17日はそういう震災を語り継ぐべきという形でシンポジウムをやったんです。入り口の所のホールはいっぱいになりました。1回限りなので、マスコミ等に宣伝してもらいました。前から私もしょっちゅう行っているんですけれども、平日であっても、人は見かけないような状況でした。今は来ていただいている方なんです。昔だったらもっと少ないんです。

（樋口副議長）

芦屋の特性なんですよ。いわゆる過疎の中で、外へ出て行けない。隣町に行くのに何時間もかかるというような町であれば、その中で生活していくという基本になるんですが、芦屋の場合は30分あれば大阪、神戸へ出られる。ニーズに合うものをいくらでも市外に求められるんですよ。芦屋市内で催しをしても市内の人より市外の人の方が多いわけですよ。カルチャーセンターでも6割は市外から来られるんですよ。逆に芦屋の人も芦屋市内のことだけで1日生活をしているかという、自分の趣味趣向に合ったものを市内に求めるよりも市外の方に行っ

て調達してくる。生活圏としては非常に広い中にいるんですよね。

だから、芦屋の社会教育で括った時に、地域というものを顔の見えるという300メートルから500メートルのところを地域と考えるのか、芦屋全域を1つの地域と考えるのかで全然意味合いが違ってくと思うんですよ。ここで議論する内容になってくると、全市的なことをもって地域と考えることの方が多いような気がするんですが、現実には芦屋にも超高級なものがあるわけですし、それこそ88の自治会1つ1つが2つと同じものが無いぐらいそれぞれの課題を抱えていますよね。だから、自治会にしろ老人会にしろ人でまとめていけない、コミスクだって9つあって皆1つ1つ違いますよ。そういうことを考えてきた時に、果たして地元のことを本当に皆さんに知ってもらえているのだろうか。それぞれの持っている課題を本当に吸い上げていただけているのだろうか。芦屋の情報を一番知るのとは広報だと言われてはいますが、広報以外に芦屋のコミュニティデータみたいなものはないんですよね。

この間、行政の方がガイドブックをつくって下さいましたよね。かなり良いのをつくって下さったんですが、あれは外部から来られた方が芦屋ってどんなところと言われた時に見せる、いわゆる表看板みたいな本ですよ。ここの中に住んでいる人にとってそのガイドブックがどれだけの情報を出しているのかというところとちょっと違うかなと。

（生涯学習課長）

この「地域を知る」ことは基本的にはまちづくりを考えた時に、この地域はどんな地域なんだろうと気づくことが第一歩。では、今のお話で行政の職員が机上で全部の施策ができるのかと言われたら本来もっと知る必要がある。例えば、市内に色々なゆかりの物がありますね。うちの職員にぬえ塚ってどこにあるんですかと聞いた時に、それはなんですと言う職員が大半なんです。阿保親王塚ってどこにあるんですか、っていうのが今の実情なんです。

全国大会か兵庫県の大会かを市民センターでされた時に、その参加者がせっかく芦屋に来るから市内のゆかりのところを案内して欲しいのでご協力いただけませんか、と市に依頼が来た時に、ではA君、B君お願いねと頼める人がいないんです。過去そういうことを手がけてきた市のOBであるとか、それ以外のグループをつくられてこられた方をお願いをするしかないんです。

例えば、市の文化財を担当している学芸員はできます。でも、発掘調査を日々している学芸員にずっと案内してくれとは、現実的には厳しい。調査を含め本来の業務をしなければいけませんから。そうすると本来であれば市の職員で何人かは出せばいいんですけれども、それすら難しい今の職員の現状があるんです。基本的にまちづくりを考える時にはもっと芦屋市そのものを知らなければいけないというのが基本構想の中で記載をした第一歩なんです。

（樋口副議長）

商工会が芦屋検定上級編を今月末でしたか、来月でしたか、私はっきりとは知らないんですけど。

（社会教育部長）

経済課の方でね。

（樋口副議長）

去年，おとしですか，一般編の場合は職員の部長は必ず受けるように要求されているとか。今回はないんですか。

（社会教育部長）

今回はまだ指示は出ていませんね。今，美術博物館検定なんかも言われているんですけれどもね。地域を知るというのは，まず，こういった良さがあるんだろうかということを経験の方が共有して，それはもっと大事にしないとだめなんだと，愛着を持つことが次のまちづくりへのステップになると思うんですよ。課題的にだめな所も見えるだろうけれども，もっと良さもあるだろう。それをなんとかしないといけないということになるだろうということが課題だと思います。やっぱり，もっと光輝くようにしようよというふうに結集していくことだと思うんですね。だから，先ほど津村課長も言っていましたように，我々も人が減ってきてましてなかなか地域に行きにくい。私は時間があれば行くようにはしているんですけれども，若い人は色々な調整や日々の実務で外に出歩けないというのが実態でして。クリーン作戦の当番でまわった時くらいしか地域の方とお会いする機会がないという職員が大半になってきているのかなと思います。

（野原委員）

国際交流協会，モンテベロ市へ毎年行っていますよね。ただ行って交流するだけよりも，芦屋ってどんなところなんだろうと，姉妹都市なのに条件が全然違う都市なんですね。芦屋ってどういうまちなの。姉妹都市はどういうまちなんだろうということを知ってほしいと提案した時があるんです。その時，ではどうしましょうということなので，アンケートを国際交流協会の中で調べた。明確な答えはなかったんです。お金持ち，いわゆる文化都市芦屋というイメージしか皆さん出てこないんですよ。それで，当時市の広報課長だった方が芦屋50景というのをわざわざ焼いて下さって，風景的にはそういうことを提案できたんです。ではこれをもってどう言っていたかと言った時に，さんざん議論してもやはり文化都市でしょうと。体外的なところになるとそこしかないんですよ。だから，芦屋の実態はどういうことかと言えば，たぶん市民はほとんどご存知なからうかという気がするんですね。

（生涯学習課長）

難しいですね。色々な機会で，そういう研究をされている方からそういうものを伝承していくということが大事なのかなと思いますね。だから，今言ったようなことなんかは，そういう人たちがいらっしゃる間に引き継いでいっておかないと何も残らない。部長が言いましたように，そういうことと共に社会教育の世界で言えば色々な地域課題をそこから見出していかないといけない。解決策を含めてどういうまちづくりをしていくかということにもなります。ものすごく広いテーマなんですけれども，悲しいかな先ほどからの通り現状では書ける項目がない。

（安東委員）

ここに書いておられる現状というのは，市の方で施策をやられてどうだったというそういうことですか。

（生涯学習課長）

基本的には各課でやっているこの項目に当てはめて今している内容等があれば抽出していくという。これはまだ完成品ではありませんので取捨選択をし、書き加えるべきものは書き加えたいと思います。

（安東委員）

ずっと行われているものというのものもあるわけですね。そういうのも現状としてあるんだろうけれども、それは芦屋の担当ではないから出てこないとなるとそこが抜け落ちるということですね。市でまとめるのですから、ある意味で仕方ないことかもしれませんが、それ以外の部分をどういうふうにとってきて盛り込むかというのがないと、現状としては一部しか見ていないと言えるかもしれないですね。

（野原委員）

私も福祉の資格を持っていますので、全国大会へ行くと、やっぱり社会教育は今福祉抜きでは考えられなくなってきていますよね。ここはここだけの部署だからと言うのではなくて、例えば、民生の人が一番良く知っていますよとおっしゃるのであれば、そういう人たちともっとタイアップすれば社会教育がもっと広がるという気がするんです。

（生涯学習課長）

地域力ということをもっと使っていこうと思うんですけれども、地域力って何なのかというと、その課題によって変わらなうと思うんですね。今おっしゃられたように、福祉という意味で見ると地域の福祉力、教育という視点から見ると地域の教育力、防災の目から見ると地域の防災力という形で、総合的な形のものとして地域力があるという言い方になるんでしょうけれども、社会教育という目で見ると、芦屋の生涯学習もしくは芦屋の社会教育ということになるでしょうし、それが同じ地域を土壌として、福祉という目でみると地域福祉になっていくだろうと思うんです。ですから、たまたま行政も含めて縦割りにしていますけれども、基本的にはトータル的なものとして見るとまちづくりになっていくのかなという感じがします。そういうものが、それぞれで仕組みをつくっていきますね。高齢者という仕組みの中では地域ケア会議を立ち上げて、地域の課題を吸い上げて、そこで解決できるもの、それを解決していくために地域の色々な教育や福祉の資源を活用していく、それがPTAであったり、自治会であったり、老人クラブであったり、もしくは福祉関係の事業所であったり、そういうものが全部集まって1つの課題を解決していく仕組みをつくっていく。でも、それを社会教育の分野に置き換えてみれば、そこをベースにしながら、例えば、子育ての問題にしてもそうでしょうし、色々な課題がある。一緒になってそこでやっていけるようなネットワークづくりができるはずなんですね。だから、1つは、教育委員会サイドが、今おっしゃられたように地域課題と言われる時には、基本的に福祉課題が多いわけですね。そういうものを含めて、どのようにして市としてのネットワークを構築していくかということがあると思います。今は、別々にやっているんです。うちで言うと、コミスクのこと。難しいのは範囲が違うんです。子ども会を見ると、町の子ども会であったり、マンションで子ども会があったり、マンション1つで

自治会があったり。福祉の場合で言えば、中学校区を1つのベースとして、中学校区ごとの仕組みづくりを手掛けていますから、そこは行政の教育との連携も必要でしょうし、そういう課題を解決していく仕組み、そこに加わっていただける指導者、そういう人たちを育成していくというような役割がこの社会教育ではないかなと思っております。これは、言うのは簡単なんですけれども、その仕組みをつくる作業が難しいんです。

（社会教育部長）

地域も縦割りで、行政も縦割り。樋口委員がおっしゃっているように、地域協議会、老人会から子ども会からコミスクから自治会から全部横のつながりをまず地域でも一体的なものを持っていただくと、行政は行政で今言った縦割りの弊害がある。良い意味でお互いの関心を、昔は餅は餅屋で干渉したらいけないから任せるということで、昔は任せてきたんですけれども、今は人も物も金も無くなってきて、連携しないとどうしようもない時代になってきています。地域の絆が強い地域は上手くいっていますね。例えば、私から見て、浜風小学校区なんかは異世代の方との交流とか上手くいっているなと思います。

（樋口副議長）

この間、放課後子どもプランの委員会が浜風小学校であり、行かせていただいて、小学校1年生から3年生がそれぞれ昔遊びをしているところを見させていただいたんです。やっぱり、ハード、ソフトが整っているんです。エリアが丁度コンパクトで、フラットで坂道ではない。新しく整備された所だから100年も前から住んでいるという人はいません。せいぜい皆さん40年前に来られた人ばかり。地域で活躍しておられるような議員さんもおられ、PTAさんもおられという恵まれた条件がたくさんありました。だけど、これを他の地域にもっていった時になんでできないんだろうと。そうすると、何が欠けているからできないんだとかいうのが結局見えてくるのではないかな。悪い所ばかりというわけではないけれど、良いものをモデルとして見て、どこが欠落しているかということを考えて、それに代わる物はなんだということを見つけ出していく方法が1つ。それから、この地域にはこんなにすばらしいものがこんなにあるじゃないかと、良いものを引っ張り出してライトを当てて、輝かせてやるというもう1つの手法もあると思うんですよ。だから、これから芦屋の目指す所は、全市的なことを考えても、神戸と大阪と競争するわけにもいきませんから。昔は芦屋というのはお金もあったし、大阪、神戸と比べても芦屋は良いんだという気構えはあった。今は、お金もないし、知恵もないわけですし、よそと比べてどうのこうのととてもできないわけだから、今現状あるものを原点としてやっていく。松下幸之助が困った時に大事なのは何かというと頑張る勇気、それから知恵を出すこの2つだと言っています。だから、まさしく今どこでもそうですけれども、日本国中が頑張る勇気と知恵を出す、そうしたら行き詰まりはなんとかあるんだろうということを聞いてなるほどと思いましたけれど、今、与えられた中でどういうものに光を当てていけば活性化していくか、元気が出てくるか、そういう知恵をださなければいけない。縦割りだとか、うちの団体がとか言っているけども後継者不足で、人は集まらないし、会費は集まらないし、お金はない。そういうなかでこれからどうしていくかということ考えた時に、芦屋の良さって何か。やっぱり自然環境ではない

か。交通の便だというのは今現在あるものですから，これから芦屋が目指していくものは何になるか。産業利益は到底考えられない。埋め立てした浜に高度医療や最先端企業の誘致を県は言ってくれたけど，結局は住宅地としてしか売れない。しかし，芦屋の住宅地としての値打ちはどんどん下がっている。何でこんなに下がってきているのか。何かが欠けてきたんでしょうか。その中で一番大事なのは芦屋の文化度が下がってきたと思うんですよ。文化度が下がってきた一番の象徴は美術博物館です。美術博物館が無ければ，芦屋の文化度があつただけで，美術博物館が出来たがばっかりに，あの美術博物館の内容を1つの芸術として見た時に，これで満足しては芦屋の文化度が高くなるはずがない。

（社会教育部長）

ちょっとは良くしようと思っているんですよ。

（樋口副議長）

どうしたら芦屋の文化度が上がるか。だから，まさしく芦屋の文化を上げるといのがおそらく社会教育のメインターゲットだと思うんです。問題を多岐にわたってどうだこうだと言うのも議論が飛んで薄まってきますから，芦屋の文化度を上げるためにはどうしたらいいのかということをそれぞれのアイデアをいただけたらよろしいかと思います。

（社会教育部長）

3月に芦屋市文化基本条例を出します。自治体としての自主的な文化施策があることを対外的イメージを持たせるために条例をつくりました。今後は財政状況に関わらず芦屋の文化水準が向上していかないといけない。誇りになるような美術博物館は，子どもに対してもメッセージ性があるんですよ。小さいまちだけど美術博物館があるんだよ，というふうなことを子どもに言えるようになりたいと思っています。

市政70周年が今年11月10日にありますので，その日前後に色々なイベント，先ほどの元気を出そうよという話じゃないんですけど，色々な冠事業も付けながら，今後の芦屋をもっと誇り高いものに，皆市民が自身を持ってもっとより良いまちにしていくという思いで取り組みをやっていく。美術博物館ですけれど，一般財源，市税の導入が8000万円くらいかかっているんです。しかし，2万4000人くらいしか年間入館者がいません。フリーマーケットや古書店それと幼稚園，小学校，中学校の子どもたちの作品を展示している時は賑わいがあるんですが，後は野原委員がおっしゃっているように，誰が来ているのという感じですよ。寂しいような状況です。これではいけないと。学校教育との連携を強めていって，子どもたちの創造性を将来そこで培ったものが大人になった時に生かされていくような連携事業をそこできちんとやっていく取り組みをやろうとしています。アイデアを出したら何とでも変えられる，ただ，私らもアイデアを出すんですけども，言いにくいことですが，現状で良いという人がいるんですよ。だから，それを潰すことになったらどうするのかとなれば消極的になる。その前やっていた人の責任を問うような場面が出てくる。それは行政としてはできないということが今までは大きかったと思います。これからの時代はそんなことではいけない。改革意識を持っていかないと市役所といえども潰れる時代が来ます。

それは市民に非常に申し訳ないことです。ある県の県民局長がおっしゃいました、芦屋は兵庫県の宝石箱だと。箱は小さいけれども、真珠からダイヤからルビーから輝いているものがどさっと入っている。逆に言えばここはダイヤモンドだけですと限定できるような所と違う。だから、芦屋らしさというのは総合的なところで高い評価をいただいている。それを、一点に焦点化しようとしても無理です。対外的に芦屋の良さって何ですか、と言われてパッとと言えないんですよ。自然環境から住んでいる人のライフスタイルから指折り数えてもかなり出てくるようなそういう総合力があるまちだと思っています。それがだんだん樋口委員がおっしゃっているように文化度が落ちてきた。芦屋も財政面で再建団体に転落するかというところで、文化振興財団も改革せざるを得なかったですし、その次の担い手というのは職員では養成しておりませんでしたから、当然、ガタッと落ちたままに。それをなんとか元の水準以上にしていこうと今のところやや取組みつつあるというのが現状ですね。

（花木議長）

先ほど、樋口副議長がおっしゃったように、文化を知るにしても、歴史を知るにしても、伝統を知るにしても、人そのものがそれに対して関心を寄せないと、これはなかなかいきわたらないと思うんですよ。ですから、そういう人の質が低下した、人そのものがなかなか自分に直接関係の無いことに対して、また、自分の生活圏に関係の無いことに対しては一切知ろうとしなくなった。歴史も含めて、そういうところを知って、それを楽しみにしていくということが全くなくなっていきますよね。自分の損得だけで生きようとしている。直接関係や影響がなかったら、知ろうとする意識が無いんだと思います。そういう人たちを変えていこうと思ったら、どこかでそういう教育が先にないと、維持していけないのではないかな。芦屋の伝統や文化を守るにしても、やはり芦屋の住民として長年芦屋の地で生活をしてきていたら芦屋のことを本当は知っておかなければいけないはずなのに、芦屋の地域が分らない。どこに何があるかもはっきりと分らない。どういう歴史があって、どういう伝統を生んでいるのかということさえ分らない。知らないという人たちが多い。そういうふうに関心を寄せられない人、質そのものがそれだけ低下してしまっているのではないかなと思いますから、そこをどうやって社会教育の教育という考え方の下で分らしめていくのか。そういう人たちを先に考えないと、いくら一部の人たちが考えて提案したって関心の無い人には全然伝わらない。そこをどうするのかということ、私は体育協会でアスリートタウン構想を出しているんですけども、そこでは、まず次世代を担う子どもたちにしっかりした人間性や社会性を学ばしていく。世代間が一堂に会して進められるスポーツ活動の中で、スポーツで鍛えながら社会性を身につけるように育てていくという考え方で地域の方々とアスリートタウン構想を立てようという形で考えているんですけども、そういうどこかで子どもたちを、今の大人たちがダメなら、今の子どもたちがしっかりと時代を担っていけるような形をつくっていく。このまま放置しておいたらおそらくまちもガタガタになってしまうのではないかなという不安さえ感じる時代だと思います。ですから、教育というのはいいかにして今個々の人たちに分かってもらえるかということをやっている限り一部の人の運動にすぎないのではないかな、それで終わってしまうのではないかなと思います。

（野原委員）

私が先ほど言いましたように、小さい時に何らかの形で芦屋というまち、あなたたちの住んでいるまちはどういうところかというのを教えた方が良いでしょう。昔は教育の中に地域だけのことを教えるというものがあったような気がするんですね。うちの子どもは大きくなりましたからちょっと分らないんですが、受験に必要な、例えば、地域だったら北海道はどこにあって、青森はどこにあるということはものすごくよく知っている。芦屋について、こういう人たちが住んでいて、歴史はこんなんで、何か見たければあそこに行きなさい、とさりげなく教える時間というのがものすごく大事だと思います。それが地域力にもつながるだろうし、その子たちが大きくなったら自然に子どもたちにもそういうことを伝えられる。芦屋もシーサイドが出来てきてから若い人たちが入ってきて、あそこで芦屋のことを教えてもらった経験が私も子どももちょっとないんですけれども。そこが欠落しているかなと思います。自治会やコミュニティがあってもそういう方向には動いていないと思うんですよ。体育は体育でいいですよ。受験に知識は必要ですよ。そういうふうになって、本当に豊かな地域力をするところが欠落しているなと。

（花木議長）

少子高齢化でリタイアされたお年寄りが増えてくるんですよ。そういう人たちに学校現場の1コマ、1時間でも出ていただいて、過去に芦屋川カレッジが戦争体験の話子どもたちにして、子どもたちからかなり高い評価を得て感想を述べていてくれたようなもの。教える側の高齢者も子どもに学ぶということが出てくると思うんですよ。子どもは大人に学ぶということができてきますから、歴史を伝えるにしても、伝統を伝えるにしても、その場で行える授業になると思うので、非常に効果的な教育が行える。社会教育と地域教育が両方学校で学べるので非常にいいものではないかな。戦争体験は1コマでしたけれども子どもたちは非常に共感をもって受け入れてくれていたんですよ。

（社会教育部長）

体験学習がほとんどなされていないんです。私たちもそうですけれども、たぶん子どもには苦労をさせたくない、余分なことをさせないというところで、逆に必要なところまで取られている。今でしたら、例えば、ピッチャーでも投げ込みはあまりしなくなりましたよね。肩を早く消耗するとかで。けれど、それは必要なものもあると思うんですよ。精神面を鍛えるとかね。それが皆練習して汗流して、涙流してというようなところは見せないようにして、あの人は天才なんだと。イチローみたいに良いところだけ見て、涙ぐましい努力のところをなるべく隠そうとしている。ですから、インターネットで確かに必要な情報だけだったら見れて便利かもしれないんですけれども、新聞だったらめくって、見たくないところもちょっと目を通す。そういう意味で、活字離れが今後の子どもの教育にとっても非常にマイナスになるのではないかとよく言われているんですが、無駄じゃないんだ、必要なんだということをもっと親も教えていくべきではないか。昔は皆良いことばかりではないんですけれども、良いところもかえってありまして。結婚するなら学歴が高い人とかね、それで皆が幸せになっているとも限りませんし、それぞれの生き方は千差万別なんだから色々あっていいんじゃないのか、無

駄とか効率というのが広まりすぎて世の中が生きづらい世の中になってきているのかなという気がしてしょうがないんですよね。

（花木議長）

大人が子どもに気を使いすぎて、子どもが大人を本当に分らなくなってしまうている。大人が弱くなってしまうて、子どもの言うことには優しくするということが教育になってしまっている。

（生涯学習課長）

「芦屋市教育振興基本計画」につきましては、先ほど申し上げましたとおり、まだ途中段階で、内部で協議をしていきますので、その段階でお送りをさせていただきますと思います。もし、こういうことがあればということがありましたらお電話でも結構ですし、メール等でも結構でございますのでお出しいただければと思います。

（花木議長）

それでは、次の議題に入りたいと思います。社会教育関係団体の登録について事務局からご報告をお願いします。

（生涯学習課長）

お手元に、登録団体名を記載しておりますものを配布させていただいております。今回申請がありましたのは19団体です。

—資料を基に説明—

（花木議長）

この議題について何かご質問ご意見がございますか。

（樋口副議長）

会場費と月何回やるかとね、回数ですよ。それから割り出して、いわゆる原価が出てきますよね。通常、社会教育の関係団体として会場使用料の減免の優遇処置を受けられる、大げさに言えば、市民の税金を少しいただいているという格好になるんですけども、我々民間カルチャーの側から言うと、公の施設を使っているところと、我々のような民間で高い月謝を払っていただいているところの差がどこにあるんだということですよ。大きく違うというのは、やはりそれで生活をしているという人と謝金をもらうことによって労働対価をもらっている人かどうかの問題ですよ。

（生涯学習課長）

基準は、例えば、絵を教えていただく、書道を教えていただく。会は自分たちでつくって指導者を呼んでくる。この人を指導者にするかどうかは皆で決める。会長も運営方法も皆で決める。これはいいんですけども、教える人が自分が教えるために何かをつくる。これはだめです。今回の要領の中にも説明をさせていただいているんです。

（樋口副議長）

福祉関係団体と社会教育関係団体と性格をはっきりさせることは大事なことですよね。集会所だとかそこら辺りの利用も含めて横の一体で整合性を出していただいた方がいいだろう。

（生涯学習課長）

そういう整理をさせていただこうと思います。

（樋口副議長）

是非とも団体調査をして、出来れば今後の支援のあり方というのを一遍出していきたい。社会教育施設が足りないことの提案といたしましては、今市内で空き店舗がどんどん増えているんです。だから、なんかそれを活性化させていくような、例えば西宮でしたら、大学のサークルが実験店舗的なことをされていますよね。社会教育の方の団体の方々に使っていただくような1つの機会ということとで考えてもどうだろうか。ご検討いただけたらと思います。

（出席者）—社会教育関係団体の適否について意見交換—

（花木議長）

以上で連絡事項等はございますか。

（生涯学習課長）

資料を作成してご報告の機会をつくろうと思っていますのは、生涯学習課は文化財を所管しています。会下山は県史跡になっているんですけれども、これを国史跡にするというランクアップの取り組みをしています。今年に入りましてからも文化庁からも専門調査委員会の方もお見えになったりして、できれば市政70周年に合わせて国史跡化をしていきたいという取り組みを今しています。また資料等のお渡しができればと思っております。その他、社会教育関係施設の市民センターの工事が終わりましたら部屋のつくりが変わります。

（社会教育部長）

教育長の冒頭での挨拶にもありましたように、市内のスポーツ、文化、学習施設が少ないということで、今回市民センターをリニューアルすることに伴いまして、若干、貸室を増やします。市民センターは、福祉会館・老人福祉会館・市民会館・公民館の複合施設になっております。福祉センターが今年7月に出来ます。福祉会館部門が福祉センターに移るということで、そのスペースが空きます。そのスペースをできるだけ貸室にしたいということで申し出ていますが、みどり地域生活支援センターが来年度から再来年度くらいにかけ工事をします。工事の間に、福祉会館にみどり地域生活支援センターが一時的におられるということもあって、貸室は再来年度くらいからになると思います。

具体的に言いますと、本館に3室増やします。2階の事務室の前に応接室があったんですけれどもそれも貸室にします。ただ、トイレを拡大しますので、貸室としては応接室の半分の大きさしかありません。また、1階にありました公民館の事務室になっていた所に部屋を2つ作りまして、そこを貸し出そうとしています。

す。多目的室を A , B と分けていましたが , 社交ダンスをされる方が敷居のところで足がひっかかったということがありましたので , きれいにフラット化して部屋を一体的に使っていただきます。それと , 別館の音楽室のミキシングの部屋があったんですけれども , そこを 8 人ぐらいの音楽室を使った時の控え室として貸し出そうと考えています。再来年にみどり地域生活支援センターの建設が終わって移動されたら , そこも 2 室ぐらいは増やせるかなと思っております。リニューアルしたあかつきには社会教育委員の皆様にも見ていただこうと思っております。

(花木議長)

それでは , 長時間にわたってご審議いただきましてありがとうございました。貴重なご意見等もいただきましてありがとうございました。これで , 全議題を終了しましたので閉会させていただきます。